



第2750地区 The Rotary Club of Tokyo South
東京南ロータリークラブ

私のロータリー五十年 黒澤 張三

私のロータリー五十年

黒 澤 張 三 （東京南 RC）



第2750地区 The Rotary Club of Tokyo South
東京南ロータリークラブ
<http://www.rcts.jp/>



目次

はしがき

ロータリー歴

私のロータリー五十年

門前の小僧

戦前の地区大会

黒澤貞次郎（真のロータリアン）（ああ黒澤さん）

東京南 RC に入会

二世ロータリアン（子供会）

三地区連合年次大会と一日講習会のホスト

青少年交換学生（事始め）

青少年交換学生（地区委員会の強化）

米山記念奨学会（事始め、全国規模展開）

米山記念奨学会（事務局担当）

心の窓（我が家のゲスト・ブック）

クラブ会長就任（前半、後半）

クラブ会長就任（沈黙の祈り）

青少年交換学生（本渡 RC との絆）

本渡 RC 週報

青少年交換学生（本渡地区大会）

新地区の創設（275地区）

国際協議会（月月火水木金金 仲間意識の高揚）

国際大会（84 Birmingham）

地区ガバナー就任（東京城南 RC 誕生）

地区大会（前夜の歓迎）

地区大会（準備と締め括り）

R 文庫運営委員会委員長就任（ロータリーを易しく）

日韓親善会議（ソウル大会支援）

94 台北国際大会（RI 委員会顧問）

地区大会 RI 会長代理（88 年京都、94 年気仙沼）

京都地区大会（会長代理）ねぎらいの握手

規程審議会（89 年シンガポール、92 年アナハイム）

青少年交換学生（パパ、ママ喜んで下さい）

日本ロータリーの原風景を辿る（東京西 RC 刊行）





日本ロータリーの原風景を辿る（その反響）
青少年交換学生（殿下からの年賀状）
「おもて」と「うら」
「アマ」と「プロ」
職業奉仕（小さな出来事、大きな喜び）
あとがき





はしがき

2002年3月私は満90歳の誕生日を迎えることが出来ました。来年4月にはロータリー在籍50年を迎えることになり、さらに次は大阪国際大会、その次はロータリー創立百周年の大きな節目の年を迎えることになります。

この時に当たり歩み来た道を振り返って何か書き留めておきたいとの思いが湧いてきました。

多くのこととの出会い、多くの方々との友情の絆を広げることが出来ました。これらの全てを書き留めることは難しく、その中のほんの幾つかを取り上げて、書きやすいように、読みやすいようにと一項目を一頁700字程に書き留めましたので、中には充分意の尽くせぬこともありこの点をご了承いただきたく存じます。

何分にも古い昔の事の記憶で誤りがあつてはならぬこと故、しばしばロータリー文庫に通い事実を確かめ誤り無きを期しました。

大先輩の直木太一郎 PG(神戸 RC)は1983年にロータリー在籍50年にあたり「わたしのロータリー50年」の著書をだされています。「これがロータリーだ」を初め多くの論説を200頁程に纏められた名著書であります。

同じ題名を借用しましたが、私にはこの真似は到底出来ず、書き出してみると、これは「私の履歴書」の様なものになつてゆくのに気がつきました。これは無限に広いロータリーの世界の中を一個人が辿つた細い細い道筋に過ぎません。何方にも何の参考にもならないでしょうが読みくだされば幸いです。

本書中の他誌からの転載部分につき「ロータリーの友」「新潮社」のご厚意を戴きましたことを感謝致します。





ロータリー歴

黒澤 張三

東京南ロータリークラブ

1954 4	東京南ロータリークラブ入会 職業分類（タイプライター製造、コンピューター販売）
1968-69	クラブ副会長（会長は松山茂助氏）
1978-79	クラブ会長（幹事は小川恵也氏）

地区（258、2750）

1970-71	258 地区青少年交換委員長
1977-78	258 地区世界社会奉仕委員長
1984-85	2750 地区ガバナー
1985-	2750 地区諮問委員会委員

ロータリー米山記念奨学会

1967-71-79	理事、常務理事
1979-83	監事

ロータリー文庫運営委員会

1988-89	委員長
1989-92-	顧問、相談役

地区大会 RI 会長代理

1988- 4	RI 2650 地区（京都）
1994 4	RI 2810 地区（宮城県気仙沼）

規程審議会クラブ代表議員

1989 1	2750 地区代表議員（シンガポール）
1992 1	2750 地区代表議員（アナハイム）

RI 94 Convention Committee(台北)

1992-94	Advisor
---------	---------





門前の小僧

ロータリーと私の出会いは 1930 年（昭和 5 年）5 月神戸での第 2 回地区大会に父貞次郎（東京 RC 会員）の家族として参加したのが始まりであつた。

戦前のロータリーでは今の忘年家族会のように幼少年者が参加出来る機会はなく、地区大会のみ配偶者と成人家族が参加を許されていたようだ。私も 18 才になつたとのことで参加をすることが出来た。もう 1 年早く生まれていたら第 1 回からの京都大会に参加の記録が出来たのにとすると少し残念なことである。それにしても、その後は、別府での第 11 回大会まで 7 回も参加し、これで何処までロータリーの本質を掴めたか、どうかは別としても大事なロータリーの雰囲気をつかむことが出来たと思う。昔の言葉では「門前の小僧 習わぬ経を読む」を体験出来たことを父に感謝している。

この間、父からはロータリーについて何のお説教を聞くことも無いし、文献を与えられたこともなかつた。またロータリーについて書き残したものは何もない。

ロータリーは頭で覚えるのではなく身体で覚えるもの。

ロータリーは教えるものでなく示すもの。

と言うのが父の信条と理解している。

戦前の地区大会は更に第 12 回が横浜で行われたが、この時は組織を変えて、第 1 回日満連合年次大会として行われた。この時点で既に時局は極めて厳しくなり、その年 1940 年 9 月には、東京 RC は国際ロータリーを脱退の止むなき事態となり、その翌年 1941 年 12 月第 2 次世界大戦が勃発の事態になつた。





戦前の地区大会（○印は私が家族会員として参加）

	場所	年月日	ガバナー	参加者数	
第1回	京都	1929. 4. 27-28	米山梅吉	385	
第2回	神戸	1930. 5. 10-11	米山梅吉	504	○
第3回	横浜	1931. 5. 9-10	米山梅吉	453	○
第4回	大阪	1932. 4. 28-29	井坂 孝	482	
第5回	東京	1933. 4. 29-30	井坂 孝	712	○
第6回	名古屋	1934. 5. 5-6	村田省蔵	413	○
第7回	京都	1935. 5. 5-6	村田省蔵	823	○
第8回	神戸	1936. 5. 2-3	朝吹常雄	562	
第9回	札幌	1937. 5. 15-16	佐藤昌介	476	
第10回	京城	1938. 5. 15-16	里見純吉	449	○
第11回	別府	1939. 4. 29-30	松本健次郎	346	○
第12回	(日満ロータリー連合会第1回)				
	横浜	1940. 5-5-6	森村市左衛門	542	

戦前の地区大会は毎年開催地が変わり参加者はその旅行を楽しみにしていた。今の国際大会に相当したのかもしれない。関西等への旅行は二等寝台車が二台増結されてロータリー・トレインと称し、これに乗ることが期待されていた。

このような事情で戦前の地区大会の参加者は会員自身より会員家族の方が多数であつた。今はどうか、何時も同じホテルで、同じようなプログラムが続くためか、興味が薄れて、家族の参加は無くなり、会員からも見放されて第二日目には参加者は半分以下になってしまう。

夫人同伴者は会長代理とガバナーと何人かのパストガバナーだけとは不思議な会合になったと反省させられる。





黒澤貞次郎（真のロータリアン）（ああ黒澤さん）



在りし日の黒澤貞次郎氏

東京R・Cの最も古い正会員であった、黒澤貞次郎君は1月1日以来脳出血で倒れ、治療中であつた處、遂に1月27日逝去されました。享年は78歳の由であります。

同君のひととなり、事業の経営方針等に就ては既に長年に渉つて世間に良く知られて居り、私が茲に述べる必要は無いのでありますが、只私はロータリアンとしての同君に就て一言陳べさせて置きたいのであります。

黒澤君こそ、あらゆる面に於てロータリー精神を身を以て實行した、模範的人であつたと私は思います。先づロータリーの目的に認めてある4項目に對して同君は如何であつたかを落して見ましよう。

○第1、同君は1923年東京R・Cの会員となり爾來30年の水きに亘つて常に100%又はそれに近い出席率を保持し理事、及會計を勤められたのみならず、會員として他會員との交友は最も廣く且つボビユラーであり、全會員に尊敬されて居つたのであります。

同君のあの、やさしい態度や天性の愛嬌は誰でも接する人をチャームせずにはおきませんでした。斯くして同君は、第1の目的たる「奉仕の機會を作るため知人を擴めてゆくこと」を完全に行つたのであります。

○第2の「職業を通じて社會に奉仕する」事に對しては、同君の事業は、50年以上になりますが、同君がロー

真のロータリアン



第609ガヴァナー

小林 雅一

タリーに入会される以前よりその精神を實行せられ、終始變らず繼續されて居つた事は餘りにも有名であります。例えば賣手と買手との關係に於ても、同君は一旦タイプライターを販賣すれば、常にそのタイプライターが完全に調子よく動いて居るか、否や、を買手に尋ね、少しでも不満足な點があれば直に修理をするか、新品と取換え、常に顧客の満足の行く様にして居つたのであります。又同君の考案された、假名文字タイプライターは最初の3臺を賣るのに實に18年も掛つた事や、唯一の得意先である郵政省に年々巨額の納入をして居るのに關はらず、未だ嘗て只の1回も御馳走をしたことがないや云う様な事柄は、ロータリーの云う賣手、買手の關係を理想的に實行して居つたと云えると思います。又勞務關係に於ては同君は完全なる家族主義を實行され、數十年前より各従業員に家庭に住宅並に茶園を提供し日常の生活に不安のない様にして來たのであつて、太平洋戦争時及戦後の食料や住宅不足の時でも、黒澤村の人々だけは餘り心配なしに生活出來たのであります。従業員の中には、三代に亘つて勤務して居る人もある由で、従業員とその家族からは慈父とも仰がれ親しまれて居つたのであります。

○第3の社會奉仕の面では同君はその工場敷地内に夙に小學校を建築して、自費を以て經營して居られたのであります。（現在は戦災のため焼失してそのまゝとなつて居る。）又早くより自費を投じて遠く玉川より水道を引き、それを附近の人々に分け與えて居つたのであります。其他自費を以て交番を設置するとか、消防署を設けるとか、各方面で多額の費用と、協力を吝まなかつたことは有名であり、ロータリーの理想を實地に勵行して居つたのであります。

○第4の國際奉仕の方面では、同君は幼少の時より米國に渡り10年間もL・C・S M I T H會社に勤務した關係上スミス氏（既に故人）の信用絶大にて今日迄50年以上も、密接な關係を保持して居り多數の友人知己を米國に持つて常に國際親善に寄與して居られたのであります。

氏は長男圭一君を英米國に留學させ、其の後1930年にはまだその頃日本人の渡航者は殆んど無かつた、ニュージーランドのオークランド大學へ二男の英二君を留學させ、將來日本とニュージーランドの國交の爲めに盡き様と爲された事などは同君が如何に國際間の理解、親善に心を用いて居られたかが窺われ、ロータリーの理想の實現に努力されて居つたことが判かるのであります。

凡そロータリーの第1の標語である“SERVICE ABOVE SELF”を同君の如く、日常生活に實行した人は世界385,000人のロータリー會員の中でも少ないと思います。同君が如何に己れに奉ずること薄く、他に奉仕することの厚かつたかは毎日新聞（2月4日夕刊）にも載つて居つた通りであり、同君を知つて居た人々の全部が認める處であらう。又その結果として同君の事業は益々榮え最近迄數年間全國個人納税者のNo.1であつた程に利益も舉つたのであります。之れこそ即ち第の標語“HE PROFITS MOST WHO SERVES THE BEST”の實踐者と云えると思います。

東京R・Cが生能同君を最も傑出したる會員（THE MOST OUTSTANDING MEMBER）としてスウェーデン國主70歳祝賀の記念品として送られた、金ピンを同君に贈與されたことは誠に故なきに非ずであります。

吾々は今、斯くの如きロータリーの極化とも謂うべき同君を失つたことは誠に悲しいことであり、日本のロータリー、否世界のロータリーの爲めにも惜みても尚餘りあることであります。

私は茲に謹んで弔意を表し、天上の同君の靈に對し御冥福を祈禱し致すと同時に遺された夫人並に御家族の上に神の御恵みと御慰の福かならん事を願ふものであります。

ああ黒澤さん 渥美 育郎

「本当に惜しい人だったね」、「モウ是からあんな人は出ないな」。黒澤さんの計をきいたロータリアン一恐らくロータリアン以外でも 君を知る程の人たちを挙げて異口同音の歎声はこれでした。私と故人との辱知は専らロータリーを通じての過去30年間でしたが、年を重ねる程に君を尊敬し愛慕する心持は愈々強まるばかりでした。然も人に対し世に処する君の挙措態度というものは、そこに些かの銜いもなければ何の工作もない、洵に天真爛漫の発露であつて、私は常に君を以て「平凡なる偉人」と呼んでいたのです。あのえびす様のようないつも笑を湛えた童顔に、ゆったりとした静かな物言い、仕事の上でも又交際の上でもあの通りの偽りのない気持でその生涯を貫かれた事と思います。但し又その





半面には、苟も道理に外れた邪惡に対してはまた酷しい反抗をも敢て辞さなかったらうと思われ、私などはお付けの性質上ついぞそんな処を見た事ありませんが、定めて永い公私の御生活に於て時には雷のおちる事も往々にして存したるうと想像も出来ます。曾て故米山翁から聞いた、故人があの大を以てしても尚且つ身を持すること只管に謹厳、浮わつた奢侈や享樂は極度に之を戒めながら、しかもその従業員の福祉や国家社会への奉仕貢献のためには又財を吝まず正義一途にその範を垂れられた様々の事実、更には君の御死後に於てその知己友人たちが二人寄り三人集まれば必らず話の出る君が過去の奮闘苦心の思い出、数々の他に比類なき美事佳談、今更ながら「ああ共に得やすからざる人だった」とその都度一同は等しく肅然とするのであります。





東京南 RC へ入会

1945 年（昭和 20 年）以来進駐軍に接收されていた銀座の黒澤ビルは昭和 27 年接收解除され、復旧工事も終り、翌新年からは自家使用が可能の状況になつていた。その喜びに新年の祝酒も大目に入つたためか父貞次郎は 1953 年（昭和 28 年）元日の夜倒れて以来意識回復せず 1 月 27 日他界した。享年 78 歳ロータリー暦は 30 年で幕を閉じた。

生前からロータリー・ライフをこよなく愛していたことの故に小林雅一ガバナーは「ロータリーの友」4 月号に二頁にわたりその功績を讃える記事を書かれて「黒澤貞次郎はロータリーの権化」との言葉までいただいた。葬儀に関する総ての行事を終えた時点で父の遺志を継ぐべく、兄敬一と私はロータリーに入会の希望を東京 RC 会員大島義清氏にお願いをした。快くお引受け下さり、私は東京南 RC への手続をされた。それから一年程の時を要したが総ての手順が完了したので 1954 年 4 月 27 日の例会より出席するようにとの連絡をいただいた。私のロータリー本番の始まりである。

当時の東京南 RC 例会日 毎週火曜日 12 時 30 分

会 場 虎の門 共済会館 会員 60 名

会 長 大矢知 昇 （東急百貨店）

幹 事 清瀬 二郎 （東京報知機）

会 計 黒川 光朝 （とらや）

クラブの創立は 1950 年 8 月 12 日であるから、3 年 8 ヶ月遅れての入会である。この時、年齢は 42 才、私よりも若い方がまだ大倉君等 4 人程おられた。





二世ロータリアン（子供会）

東京 RC の創立から 30 年余、会員の子息がロータリアンとして活動出来る時期になつていた。一業一人の厳しい規律もあり、アデイショナル会員での逃げ手もあるが、出来れば別のクラブで伸び伸び活動をとの期待もあつた。その時に南、北や、少し遅れて、東、西クラブの創立はその期待に大きく役立った。東京南 RC にも黒川、松本、津村、渥美、大倉、大滝氏等二世達に更にそれに同じ年頃の堤、伊東、山内等の諸氏も加わつた子供会の面々が私の入会を待ち構えてくださつた。お蔭で直ぐ友情の絆を深めることができた。

何をするにせよ、先ずは若い力の結集が必要との意気込みが、この子供会の基本であつた。

私は築地明石町の生まれであるが 3 才の時に府下荏原郡蒲田村の田舎に引越した。小学校は数寄屋橋の泰明小学校に越境通学したので銀座の空気を吸うことは出来た。更に横浜での学生生活を終えてからは専ら蒲田工場での勤務になつた。ここは工場に隣接して従業員福祉設備として菜園までついた戸建住宅、共同浴場、幼稚園、小学校までもあり、これを「吾等が村」と呼んでいた。所謂田園工場 (Factory Village) とか、理想郷 (Utopia) とかとも言われ、職業奉仕の好例の一つとしても取り上げられた。戦中、戦後の食料不足の時も野菜類の自給に役立ったし、接待関係の必要もなく、赤提灯居酒屋、料亭とも縁がなく、酒煙草の配給は総て親父の所に廻していたので、その嗜みもないままロータリーに飛び込んだが、それでは駄目とのこと改めて社交術の特訓を子供会から受ける次第になつた。





三地区連合年次大会と一日講習会のホスト

入会し2年が過ぎた頃、突然大荷物が転がり込んできた三地区連合年次大会（1957年9月28-29日）のコ・ホスト役だ。佐久間氏が実行委員長だけに南RCの負担は大きかった。予測は2,500人これだけ収容出来るホテルがない。代々木の東京都体育館だけが可能だ。食事はどうするか、弁当仕出し屋の選定にも苦労する。流石に各種業界の方が揃うロータリーでは解決することが早く、記念講演は吉川英治氏、余興は花柳徳兵衛氏と決まる。

途中でまた荷物が増えた。大会の前日に一日講習会(One day Institute クラブ会長等の研修会)参加予測200名の準備だ。この程度ならばホテルが使えるから簡単である黒澤1人で担当せよの指示が出る。会場は前夜懇談会が予定される東京会館と決まる。これなら安心、予め示された通りの総ての準備を整え当日を迎えた。

一日講習会のカウンセラー黒川巖 PG は極めて厳格の方で難解な広島弁で分秒を競う正確さで行事進行を要求され困惑をした。勉強会の準備は簡単だが当日は難儀した。それに比べ、お祭りの地区大会は準備が大変であつたが当日は楽しみが一杯であつた。休憩室にはお茶もお酒も用意され、銀座のエスプワールの美女達の姿も見えた。これは巧妙な子供会特別企画の隠し味で好評であつた。

三地区連合地区大会（1957.9.28-29）東京都体育館

ホスト	東京 RC	コ・ホスト	東京南 RC、東京北 RC
ご来賓	高松宮同妃殿下会長代理		George Means
350 地区	(北海道 東北)	ガバナー	佐藤 幸三
355 地区	(新潟 関東)	ガバナー	東ヶ崎 潔
360 地区	(中部地区)	ガバナー	盛田 秀平
大会実行委員長	佐久間長吉郎	参加者	2,276 名
一日講習会カウンセラー	黒川巖	参加者	204 名





青少年交換学生（事初め）

1964 年湯浅恭三ガバナーからロータリーで交換学生制度が始まり、シドニーから申し出が来ているが南、北の両クラブで1名宛受け入れないかとの連絡があつた。北は木本氏(YMCA)、南は私が出て検討したが、何分にも前例もなく、状況が定かでないので、取り敢えず1名を受入て前半を南が、後半を北が担当で受入が決められた。当時は地区資金もなく、費用については学費、通学費はクラブ負担、生活費はホスト会員の負担と決められた。受入学校は東京 RC の森村義行氏の配慮を得て森村学園と決められた。

1965 年4月7日 Chereln Sellar が来日し、桜が満開の時であつたのでチェリーさんと呼ぶことにして我が家での生活が始まつた。

早速に森村学園に連れて行くと、本人の日本語の知識は皆無で「いろはのいの字」も知らない、これでは困る、何処かで日本語を勉強させて下さい、9月から受け入れますとのことになった。個人教授を探し勉強させた。ホスト家族は3ヶ月位で交替が好ましいが、後続がない。夏の間は軽井沢に別荘をお持ちの方が引き受けて下さり助かつた。9月から森村学園に通うことになったが、後半を担当する筈の北クラブからはホスト家族が無いので中止を申し出てきた。思わぬ混乱が起きたが何とか切り抜けて、予定通り一月末に帰国させることが出来た。

地区委員があるものの何の支援も指導も出来ない状況では、一クラブ、一家族では到底負担に耐えられない事情を次の松方三郎ガバナーノミニーに報告し、地区組織の改善強化をお願いした。松方 GN は浅野均一氏（西北 RC)に調査を指示され改善が図られることになった。





青少年交換学生（地区委員会の強化）

浅野均一氏（西北 RC）の調査により、湯浅 PG の夫人の個人的グループがこの活動に関与し、その子女に優先留学の機会を与える情実を排除して、公正に学生の選抜、事前研修、相手国や、受入学校との交渉、経費予算の確立等を地区組織を強化して実施するように定められた。学生の選抜から帰国まで3年の期間を要するので委員の任期も同じ3年とし、委員の子女は派遣に応募の資格なしとした。

1968-69 年度より奥山義人氏（日本橋 RC）を委員長とし新制の地区委員会が発足し、私も委員の一入になった。69-70 年度は野生司氏（小石川 RC）が、70-71 年度は私が委員長を勤めることになった。

1970 年 RI 理事会は青少年交換活動についての指標(Guide Line)を示したので、これに準拠して「国際青少年交換計画の手引」を作成し、この活動の基本的姿勢とした。70-71 年度の派遣学生の選抜試験を終り7名（男2名、女5名）の派遣確定したので、安田ガバナーに報告したが、ガバナー曰く「学生派遣の男女比が悪い。男子を増やす努力をされたい」と、私は答えた「男は大学受験直前の一年間の遊学は厳しい、それに比べ女子はその負担が軽く、やがて立派な国際的感覚を持った教育ママに育てられた子供が大きくなつた時は女子の方がより大きな効果が期待出来る」と、ガバナー曰く「君は気の長い人だ」と。でも、それから30年、今その時が来たようだ。

70-71 年度 派遣学生7名（男2、女5）出身校

男子（日比谷、日大一）女子（学習院2、慶応2、成城）

受入学生 5名





米山記念奨学会（事始め、全国規模展開）

米山記念奨学会の元は東京 RC の米山基金(YONEYAMA FUND) であり、1957 年頃より全国組織への改組が始まった。

この実務を担当したのは塩原禎三氏（三共製薬）であつた。彼は二世ロータリアンであり名門校プリンストン大学卒で、職業上の務は余り関係無く、ロータリーの為に多くの時間を傾倒された。私の留学生に対する特別の感覚を何処で見抜いたのか定かでないが、改組業務にしばしば呼出されて蔭ながらお手伝いをさせられた。全国のクラブの足並みが揃うのには 10 年近い歳月を要した。

1967 年全国組織の財団法人発足時から私は理事としての業務についた。とは言つても常務理事兼事務局長塩原氏の相談相手というのが実情であつた。

何しろ大きな基金があるわけではない「月に煙草 1 箱を儉約して」が合言葉、半期 300 円、年 600 円を喜捨願つての資金集め、この様な奨学金制度は他に例もなく、各面に於いて試行錯誤もあり、軌道に乗るまで問題を解決して行かねばならぬ事が多かつた。

有楽町の飲み屋街にあつた仮事務所も 1970 年にはタイムライフビルの新館に移動し、事務所らしい体制も整つてきた。1970 年に塩原氏は専務理事に、私は常務理事に昇格した。漸く業務も落ち付いた 1975 年塩原氏は急に病を得て 1 ヶ月余の入院後急逝されてしまった。激務の為病の発見が遅れた為であろう惜しい方を亡くした。今日の隆盛な米山記念奨学会の基礎を築いた最功労者である。この欠員を補うため、東京 RC の廣田弘雄氏（元外交官）が専務理事兼事務局長（有給常勤）として着任された。しかしこの方は 1 年程の後、突然に退任し、ロータリーも退会されてしまった。事務所は abc 会館に移動した。





米山記念奨学会（事務局担当）

1977年専務理事兼事務局長廣田弘雄氏が退任後の事務局を担当するよう要請されたが、私には自己の職業上時間的余裕がなく、常勤することが出来ないので、奨学会の将来の発展に備え、従来の事務局長常勤制度に代わり、通常業務を事務局職員に出来る限り権限を委譲し、奨学会は運営管理に重点を置く制度を提案した。

そのため奨学会は隔月毎に常務理事会を開催することにし、事務局の人々（南郷、机）も業務増大の負担と責任の重みによく耐え、事務局の基盤構築に努力をされた。私も週に1、2回、1、2時間をさいて事務局を廻り、管理と実務の間の調整に努力をした。

年度末、決算報告書作製にはグラフ等を多用して年度毎に変わるガバナー（評議員）の方々にも、その変化が分かりやすいようにと工夫を凝らした。

年毎に急増する会計業務に備え、公認会計士の派遣、指導を受け、新たに「会計事務規程」を制定した。

事務局の担当は3年間の短い期間であつたが、その間に寄附金に対する免税措置の認可(1978)、元米山奨学生の名簿作製、米山功労者表彰のためのメダル作製等新たな業務を順次消化してゆくことができた。

1979年常務理事を退任、監事を2期（4年間）勤めた。

1983年ガバナーを指名された機会に、これに専念すべく17年間にわたる奨学会の役員を退任させて戴いた。

当時の世相は、厳しい学生紛争、労働運動（メーデー）オイル・ショック等で、必ずしも安定した事態ではなかつたが、幸い日本のロータリー拡大は順調に進み、東京国際大会(1978)の開催で更に成果を上げ、奨学会に対する支援も高まり、今日の隆盛な姿の基盤が出来上つた。





心の窓 (我が家のゲスト・ブック)

大昔から文化の流れはインド、中国、朝鮮を経て日本はその終着国であつた。それ故、中国に学びに行くことがあつても、日本に学びに来る人はなかつた。

日本への留学生記録は日清戦争(1894-95) 後、敗戦国の中国が 20 名の若者を選び日本に派遣した。この受入は日本政府も初めての事で戸惑つたが、慶応義塾に学ばせ何とか形を整えたが宿舎は民宿に任せたのが悪く、戦勝国の勢いに乗つた日本人は中国人を侮蔑したため、1 年も経ぬ間に皆帰国してしまつた。

時は過ぎ、第 2 次世界大戦の初期東南アジアを占拠した日本は、将来に備え、その地域の特に優秀な若者を選び日本で研修させた。南方特別留学生である。来日の初期は良かつたが間もなく戦局は厳しく、食料は不足、空襲を避け防空壕の中の生活等で留学としては最悪の状態であつた。終戦となり帰国したが、彼等は今は一番の親日家として活動をしている。彼等は言う。防空壕で共に過した頃の日本人の心の窓は開けていたと言う。しかし、やがて日本が奇跡的復興を遂げた時日本人はまた心の窓を閉ざしてしまつたとも言う。

私はロータリーの来日した留学生達との交わりの体験で「心の窓」を開く早道は我が家の開放と悟つた。それには家内、家族一同の絶大な協力があつてこそ達成出来ることである。我が家に招く時は誰か友達と一緒に連れて来ることを勧めた。その友達との会話を聞いていれば滞在生活の良否がすぐ判断できた。帰りがけに我が家のゲスト・ブックにその日の短い所感を書き残してもらい、更にその日の写真一枚を添えた。この本も今は 9 冊目を終わろうとしている。我が家の宝の一つである。





クラブ会長就任（前半、後半）

78-79 年度クラブ会長就任を指名された。後 2 年で創立 30 周年を迎える時期、会員数も 216 名にもなっていた。当時クラブ会長は、西野、米山、御手洗と大物の後に、中谷、山口、黒澤と子供会の若手が続いたこともあり、この大役を務めることに大先輩の方々は何かと心配されて細かいご注意をくださった。

ある方は、会長職は一年一度限りのことだから、十分に注意して完璧を期すようにとの厳しいご注文であつた。また別のある方は、例会は一年に 50 回全部を自分一人ですることは避けよ、時々休め、そして副会長を壇上に立たせて、将来の為の訓練をさせよとのご注意である。

丁度 10 年前であつた、サツポロビールの松山さんが会長の時、事務所は同じ銀座の直ぐ目の先の近くだから副会長の役を務めよのことでお手伝いをする事になった。松山さんはお忙しい方でしばしば例会を休まれた。

本番で立つのと、代理で立つのでは緊張の度合いも違いなんとか、この務めを果たすことが出来た。

この事を思い返して、松山さんは私の訓練の為に休まれたのかと遅まきながら感謝の気持ちを捧げたのである。そこで私はこの年度の例会は前半を完全に休まず務めたが、後半を時々休み、副会長の立川さんに代理を務めていただくことにした。

ロータリーで壇上に立つて話をする事は難しい事であつた。私のガバナー一年先輩の清家さんは自分は千人の学生の前で話をする事は容易だが、百人のロータリアンの前で話をするのは難儀のことだと言われた。ロータリーは「人作り」も大切な仕事と悟った。





クラブ会長就任（沈黙の祈り）

ロータリーの友 1978 年 10 月号 安積得也（東京南）

東京南クラブの例会は毎週木曜日、会場は東京会館である。今年度の初例会は去る七月六日であつた。この日、一寸したサプライズがあつた。沈黙の祈りである。

型の如き点鐘について、黒澤張三新会長は口を開いた。

「只今から通算一四二七回の例会を開きます。本日は新年度になり初めての例会でございます。私はこの一年間会長を勤めさせていただく黒澤でございます。会長としてのご挨拶は、後ほど致すことにして、今日は月初めの例会ですので従来のしきたりにより、まず国歌とロータリーソングを歌つて、会のプログラムを進めてまいりたいと思います」そう言つて黒澤会長は会場を見渡した。彼は語調をあらためて「さて」と言つた。

「今この様にあらたまつた気持ちでこの台に立つてみますと「どうか、この一年間、世の中が平和であり、そして会員の皆様が一層ご健康で、ロータリーの良き働きと良き楽しみに満ち溢れた年であつて欲しい」と祈りたい気持ちで一杯であります。もし皆様のお許しが得られるならば、少しの時間をいただき、この祈りを込めてみたいと思います」敬虔な空気が会場を支配した。

黒澤会長は低い、しかも強い声で「ロータリーの弥栄をお祈り下さい」と言つた。沈黙の数十秒がもたれた。これは東京南クラブとして初めての経験である。勿論、物故者への黙祷はある。しかし、クラブ例会での平和と幸福への「沈黙の祈り」は初めてである。

私は二年前アメリカの旅でワシントンを初め4クラブの例会に出席した。どこの例会も祈りの言葉に始まつた。私にとってアメリカの例会での「七つの驚き」の筆頭は「祈りがある」ことであつた。

東京南で「沈黙の祈り」が実行されたことは、私にとって画期的の驚きと喜びである。たまたまビジターとして来場の藤山一郎氏も「心から同感」と敬意を表した。同じく来会の東ヶ崎元 RI 会長も先代黒澤ロータリアンの逸話をひきながら、ヤング黒澤の勇断を賞揚された。





青少年交換学生（本渡 RC との絆）

1976 年 3 月 16 日日曜日の早朝、帰国学生を出迎えに羽田空港に出かけた。日航 772 便は定刻到着、学生は皆元気に帰ってきた。出迎えの家族への引渡しを概ね済ませた時、まだ一人の見知らぬ学生が淋しく立っているのに気がついた。どうしたのかと訊ねると、静岡の姉が迎えに来るはずだが会えない。熊本まで帰りたいが航空券の用意がないとのこと。名前を聞くと本渡 RC の浪崎恵美子とわかり、取り敢えず航空券を用立て飛行機に乗せた。

これまでは、ただの小さな善意行動の一つにすぎないがこれから不思議な奇遇の重なりで大きな反響が起きた。それから一年経た時、本渡 RC 会員田口氏が「友」に「交換学生の渡航に思う」の記事を投稿された。

本渡 RC はオーストラリア・ニューマーカス市と単独学生交換をしており本年は 3 人目の学生中島徳子を羽田空港からキャセイ航空便で送り出した。単独行では淋しく不安なので、その便には他地区の学生団体もあると聞きこの便を選んだ。当日両親に伴われて羽田空港に来たが、確かに 10 人程の何処かの地区の学生達もいた。航空会社の親切なアドバイスでその団体と一緒に行動をするように勧められた。両親はその団体に再三交渉をしたが同行を断られ、止むなく一人旅となった。年若い娘を見知らぬ土地に手放す両親の気持ちは如何ばかりかと思うと、厚意と友情を深め、他人への思いやりを大切にするロータリーがこれで良いのかと、両親の報告を聞き、会員は憤慨をした。どうかこのようなことが再び起こらないようにと願って止みません。

この記事を目撃した私は直ぐ本渡 RC 宛に手紙を出した。

これは初めての経験で、何か虫の知らせかもしれない。





本渡 RC 週報

第12号

本 渡 R C 週 報



ロータリーを私は信奉する

[497R1 会長 ロバート・A・マンチエスタ]

第373地区 本渡ロータリークラブ

熊本県本渡市本渡町南地区内

TEL (09692) 2128

発行人 会長 渡 野 万 吉

会 員 長 渡 野 万 吉

会 員 長 渡 野 万 吉

第12回例会 9月12日 火曜日 開会点鐘 12時30分 於 本渡大広間

それでこそロータリー

心暖まるロータリー精神

東京 南R.C. 黒澤張三君よりの手紙

原文のまま御披露致します。

今朝の新聞によれば、17号台風は長崎上陸とのことですが、貴地区では被害はございませんでしたでしょうか。お見舞い申し上げます。

さて「ロータリーの友」9月号にて「交換学生について」の記事を拝見させていただきました。どの様ないきさつがあったのでしょうか存じませぬが「それでこそロータリー」と申すには似合ふ出来事と感じました。読み終えて、ふと昨年3月の或日のことを思い出しました。3月16日当地区からのオーストラリア派遣中でした交換学生の帰国を迎えに早朝羽田に参りました。予定通りに到着した JAL 772 便には他地区からの学生も乗って多数が帰国しました。皆それぞれ迎えの人と帰国の喜びの挨拶をすませ帰って行きました。これで終りだなとあたりを見廻すと1人の女子学生がまだ出迎えの人と逢えぬらしく淋しく立って居りました。「どうしたのか」と尋ねますと「静岡から姉が迎えに来るはずだが来だ見えない」とのこと。「近頃新幹線はよく遅れることがあるからその内、見えるかもしれない、もし何か困ることがあったら電話するように」と名利と10円玉数枚を渡して、私は所用があったのでとちやえず銀座の会社に戻りました。正午近く電話があり「まだ迎えが来ないが今日中に、熊本まで帰りたいが金銭の持ち合わせが無いので航空券を貸すお金を貸して欲しい」とのことでした。140分程で空港に行けるからその場で待つよう」指示し空港に参りました。先ず朝から待っていたので空腹であろうと、サンドイッチと牛乳を与え、航空券を貸し又荷物も預けオーバーする事で係員に、この次第を話しオーバー分は無料サービスをするよう交渉をし、熊本までの直行便は満席でしたので、大阪乗換えの便に乗せました。その学生はスポンサークラブが本渡RCで、渡野恵美子と申して居りました。この話は別に表に出す程のことでもないで本日まで誰にも伏せて居りましたが、今「ロータリーの友」を読み、貴クラブの皆様が不快の気分になられていることを知り、このことがせめてその穴埋めになればと思い出すまま書き綴りました。ロータリーにこのようなこともございます。どうぞロータリーを楽しくお過ごし下さいませようお願いします。

1977年 9月13日

東京南ロータリークラブ会員

黒澤張三

田口達バスト会長が読み続けられる、心暖まる手紙に会員一同、感謝と感激の森羅な雰囲気につつまれ、黒澤張三君の理論をふまえた実践とお人柄に、それでこそロータリーだと感銘致しました。

どうか今後共より良き奉仕の理念にもえお互がお互同志しっかりと手を握りあい、ロータリー精神の高揚に努めたいものです。

黒澤張三君 本当に有難うございました。心より厚く御礼申し上げ、末長き御健康と御幸をお祈り申し上げます。 本渡ロータリークラブ会員一同

例 会

会務報告

田口達バスト会長

※本日社会長、副会長とも所用の為欠席でございますので私がかかわって御報告致します。

※本日の卓話係は堀田善久君より「ヨーロッパ旅行」についてお願い致しました。

※私が「ロータリーの友」9月号に投稿致しました、「交換学生の渡航に思う」について早速手紙を戴きましたので御報告致します。

雑事報告

津田安俊幹事

※ガバナー月信4 到着(3部)

※八代南証証式案内状 日時 11月7日

※東京都港区芝公園A B C 会館7階ロータリー文庫

※杉野委員長より本渡RC設立経過報告書 寄贈、依頼

※R A C 350 地区(北海道)研修メンバー案内

※松山マミ子嬢より音信(ニューマーカーより)

※前週の理事会報告(牛深地区台風見舞の件)

スマイル

原浦俊之スマイル委員

※川副巧君 7月より設備工事をしておりました夜間金庫の設置が完成致しました。よろしく願います。

※松岡賢政君 第2回マツヤスポーツゴルフ友の会を開催しましたところ、多数参加を得、盛大な大会を終了出来ました。皆様の御援助に深く感謝致します。

※堀田善久君 恵美子のお母様ヨーロッパ旅行無事帰って参りました。お世話になりました。

※津田安俊君 俳句の大先生、後藤是山先生が90才の高齢にもかかわらず、俳誌「東火」の再刊をされる事を心より喜んでおります。

※早退スマイル 三角君、江上君、西岡君、横山榮君





青少年交換学生（本渡地区大会）

それから10年の歳月が経つた1987年10月17・18日の両日、272地区年次大会が堀田善久ガバナーの主催により天草の本渡で開催されることになった。

この日は丁度インドのニューデリーでアジア地域大会参加の旅行と予定が重なるので、これを何とか早めに切上げて、予てから是非一度訪ねてみたい天草に参加を申し込みすることにした。

この大会では「響け！ 奉仕の歌声」のテーマのもとで藤山一郎氏（東京西RC）の記念講演がある由、彼は「楷書のロータリアン」と言われるほど何事にもけじめを正しくつける方であり、私のクラブ会長の初例会にわざわざ来会され、今日はソングリーダーを務めてあげようと「君が代」と「奉仕の理想」のタクトを振つてくださった方でもあるので、そのお礼と応援をも兼ねてのことになった。

大会行事が無事に終わった後の夕刻に関係者が集まり、座談会「甦る！ 奉仕の絆」の催しが堀田ガバナー司会で行われた。当時の学生浪崎恵美子は既に2児の母親であり大阪在住であつたが、当日は本渡に里帰りをされ再会を楽しむことが出来た。

翌日は本渡クラブの稲垣、多田両氏の案内で天草の名所巡りを楽しみ東京に戻つた。

この時のことは「友」1988年3月号に「地区のたより」「甦る！ 奉仕の絆」として4頁にわたり記載された。

4月には京都の地区大会に会長代理として出席のこともあり、この情報が京都会員の方々まで広く伝わつた。

10年前のほんの小さな出来事が、大きな反響を呼んだ。

「さざれ石が巖となる」譬えを実感する思いであつた。





新地区の創設（275地区）

ロータリーの発展につれ東京地区は1980年2つに分かれることになった。数年前より境界線が検討された結果、東京 RC は北グループと沖縄を加えて従来地区に、南グループは中央区と更にグアム、サイパンを加えて新地区創設と決められた。この新地区初代ガバナーとして服部禮次郎氏（銀座 RC）が就任された。

日本の地区は概ね1県1地区で構成され、その県庁所在地の歴史も旧く大きいクラブがリーディングクラブとして活動する姿勢であり、私はこれを富士山型地区と称している。

これと比べ、この新地区は南、日本橋、銀座、西クラブ等いずれも創設以来略30年、会員数も200名を超える稀に見る形態をしているので、私はこれをアルプス型地区と考えている。

さて、この形からリーディングクラブとは何か、本来 RI は所属クラブに新旧、大小の差別を付けていない。定款、細則、手続要覧どこでも皆平等の扱いである。しかし、「奉仕の理想」の志を持つ者の集まりであり自ずから、「あのクラブの活動は」と注目の的になることは自然の理であろう。

ハロルド トーマス元 RI 会長はロータリーの花園には赤一色で埋まるのは危険である。赤あり、白あり、黄あり、紫あり様々な色で埋め尽くされてこそ美しいと説かれている。また、自分はただ一人の人間に過ぎない、何もかもすることは出来ないが、出来ることは断固として行うことにしていると説く。

活き活きと様々な活力あるクラブの集まるアルプス型地区こそ、ロータリーの真の姿ではなかろうか。





国際協議会（月火水木金、仲間意識の高揚）

国際協議会は 1984 年 5 月 23 日 30 日の 8 日間フロリダ州ボカラートンで行われた。

この協議会ではどのような型式で研修するのか事前に知りたいと思い文庫等に行き調べたが余り適切なものが無くレーク・プラシットに行かれた大先輩に質すと「楽しかった」の答えだ。ボカラートンに行かれた先輩に質すと「忙しかつた月火水木金だ」の答え。更に別の方に質すと「ロータリーの規則の勉強なら日本でも出来る。世界中から集まるからには、それが如何に国際的のものを勉強してくることが大事」と諭された。。

私はインディアナで農場を経営する友人が、ロータリーの研修は厳しいと聞くが事前に我が家で数日を過ごして時差ボケ調整をなさいと誘いを得たので有難くでかけた。見渡す限りの畑の中の一軒屋で二日間を過ごして日本からの一行とシカゴで合流し、エバンストンの本部見学とポール墓参りを済ませボカラートンに入った。ガバナーN夫妻等千名に本部指導者の方々を含めて千二百名がホテルを借り切つての催しであつた。

午前中は大きなホールで会長等指導者の講演（主要国語の同時通訳）、午後は 15 名程のグループに分かれての各国語での討論で過ごした。

晚餐が要だ。10 名程が一卓に付くが日本人だけが一塊になることは許されず皆離ればなれで着席大きなメニューから各自好みのものをオーダーする。料理が出てくるまで時間がかかる、その間近隣の人々との会話で如何に国際的かを悟った。食事の終りは 11 時近かつた。それから部屋に帰り地区宛の手紙を書き寝るのは 1 時を過ぎていた。奉仕の理想の仲間意識を高揚する 8 日間であつた。





国際大会 (84 Birmingham)

1984 年の国際大会は 6 月 3 日－6 日英国 Birmingham で開催された。Bokaraton での国際協議会を終り直ぐ NewYork、London 経由 Birmingham の国際大会参加、二つを一つに纏めて都合が良いが、旅程の上では三週間で世界一周の大事になった。そこで我々の同期会を BB 会と名付けている。

この翌年からは国際協議会の時期が早められ、今は 1 月下旬になつていて、2 回に分けての旅行になった。国際大会参加の楽しみは大会出席もさることながら、この前後の数日間を「奉仕の理想」に志を共にする友人との旅行の楽しみは格別の楽しみであつた。

1961	東京	
1971	Sydney	交換学生会議
1978	東京	
1984	Birmingham	世界 1 周
1987	Munich	ロマンチック街道
1988	Philadelphia	カナダ訪問
1989	Soul	(日韓親善委員会)
1990	Portland	アラスカ・クルージング
1991	Mexico	カリブ海クルージング
1992	Orland	デイズニーランド
1993	Melbourne	エアズロツク
1994	Taipei	(国際大会委員会)
1995	Nice	地中海クルージング
1996	Calgary	国立公園巡り
1997	Glasgow	ミラノ・アイルランド





地区ガバナー就任（東京城南クラブ誕生）

1984年7月1日の地区ガバナー就任の当日一寸したサプライズがあつた。東京城南 RC の誕生である。

前任の清家ガバナーは予めから目黒 RC の子クラブとして朝飯会の城南 RC の創立を計画され、総ての準備を終え、後は創立総会を残すのみの段階で、清家ガバナーは私に言われた「後は君がやれ、7月1日夕刻創立総会をするそれが終わる時刻を見計らいエバンストンにFAXを送る。RI本部のカンセコ RI 会長は新年度朝一番に新クラブ誕生の報を手にするでだろう」誠に見事な企画である。私は棚からぼた餅の気持ちで戴いた。ここまで相手の心を読む清家ガバナーの配慮に敬意を表した。

7月1日の創立総会と同じ東京プリンスホテルに集まっていた同期ガバナー全員も参加し祝意を表してくれた。

このクラブの認証状伝達式は華美に流れず、簡素にして充実にとの要望に応じて11月20日に会場は日本橋の三越劇場で祝宴も同食堂で焼鳥、おでん、寿司といった類の料理をを用意することで着々と準備が進められていた。たまたまカンセコ RI 会長が11月19日来日されることになり帝国ホテルで歓迎晩餐会が催されることになった。この機会を捕らえ認証状は RI 会長から当日参加の宮坂修吉城南 RC 会長に直々に手渡された。

このように RI 会長から直々認証状を受けたクラブが他にあるだろうか、私は聞いたことがない。

翌20日の認証状伝達は二日続きのことになったが、参加者は700名にも達し喜びの気分は一層盛り上がった。





地区大会（前夜の歓迎）

84・85 年度地区大会は2月1日、2日東京プリンス・ホテルで開催される、記念講演は慶応義塾塾長石川先生、記念演奏は元R財団奨学生、NHKの協力等と定め、これにより東京芝 RC のホストにより、牧野大会委員長の指導により着々と準備が進められた。

12月の半ば、カンセコ RI 会長より大会への会長代理として RI 理事呉在景氏（ソウル RC）夫妻を派遣するとの通知をいただいた。

早速、韓国語のXマス・カードを作製し、併せて大会にご来席をお待ち申し上げる手紙を差し上げた。

さてどのようにして歓迎申し上げるか、通常の前夜歓迎晩餐会では済まないと感じた。自宅にお招きしよう、家内の手料理を召し上がっていただこう、これしか外に考えられなかつた。これが心の窓を開ける一番の方法だ。この大仕事を家内も心よく引き受けてくれた。

前日午後2時成田ご到着をお出迎えし、ホテルに向かう車中にて今夜のご案内を申し上げますと、一寸驚かれた様子であつたが、心よくご承知下さつた。これが実行された。会長代理と言う最高のお客様を我が家（兎小屋）にお迎えすることが出来た。前代未聞のことである。

我が家のゲスト・ブックにご署名して下さつた。

本当に有難うございます。

人を作るロータリー

心を洗ってくれるロータリーを通じて学びます。

平凡を非凡とすることの喜びロータリー

奥様に多くのことを学んで帰ります。

一九八五年二月一日の前夜

呉 在 景

申 載 徳





地区大会（準備と締め括り）

大会は登録者（招待者含め）2,128 名（内婦人 300 名）司会を NHK 野中ともよさんのご協力を得て進行された。会長代理の RI 現況報告、地区現況報告等型通り済ませ、記念講演「これからの社会と教育」で慶応義塾塾長石川忠雄先生は「学生には未来からの呼掛けに応えられるような教育をしなければならないが、今の何事も不透明な時勢では未来の予測が難しい」と説かれた。

記念講演「新たな発見 情報革命時代」で NHK 鈴木肇氏は「交流あれば栄え、交流止めば滅びる」と結ばれた。第一日を終り、第二日の最終プログラムを元 R 財団奨学生コンサートとし森田澄夫等で締め括ることにした。

R 財団に寄付をされた方々とその奨学金を受けて学習を終えて帰国した人々との地区大会での体面はかつて無いことで、財団奨学金制度の成果を誇ることが出来た。

森田君は言つた。声楽家は朝起きてから、段々に声を整え、夜の演奏会に丁度本当の声になる。朝の 11 時の発声は大変なことです。何事も準備の時間が大切なことであるが、過密な大会プログラムの割当の重要さを了承してもらうことが出来た。

会長代理は永六輔の詩を借りその所感を締め括られた。

生きて行くことは、誰かに借りを作る事

生きていることは、その借りを返して行く事

誰かに借りたら、誰かに返そう

生きて行くことは、誰かと手を繋ぐ事

繋いだ手の温もりを忘れないで居る事

めぐり会い、愛しあい、やがて別れの日

その時に悔やまない様に 今日を明日を生きよう

人は一人では生きてゆけない。





R 文庫運営委員会委員長就任（ロータリーを易しく）

1988-89 年度にロータリー文庫運営委員長を勤めたが、この間、一層多くの文献と接する機会を得、ロータリーを難しくしてはいけなと強く感じた。

1949 年、東京、大阪等の戦前からの RC が RI に復帰した後その 11 月には戦後の最初のクラブとして一宮 RC が創立した。それだけに何の資料もない中を大変苦勞されて、この大仕事を完了されたのが初代一宮 RC 会長安野譲次氏である。その苦勞の後、悟り得た結論であろう。

ロータリーは長い竿で空の星を搔き回すのではなく、足元の小石を拾うようなものであると説かれている。 また

「春の雨」と題されたものに、ロータリーの奉仕は春雨のごとく、静かに明るく人知れずに大地を潤し、この世を美しく住みよくするものである。時には夏の夕立のような豪快なものも必要かも知れない。しかし私は、静かで目立たない奉仕に共感を覚えると説かれている。

1938 年 5 月戦前朝鮮京城での地区大会で来賓として見えた朝鮮軍司令官小磯国昭中将はその祝辞の中で「ロータリーでは幾つか標語を使われているが、日本の古い歌にもそれと同じ趣旨のがある」と一つの歌を紹介された。

わが為になすはわが身の為ならず
人の為こそ 我が為と知れ （詠人知れず）

私が「門前の小僧」時代に聞いた話である。





日韓親善会議（ソウル大会支援）

1979年アジア地域大会がソウルで開催された機会に日韓親善会議を定期的に開催しようとの案が決められたが、幸に1982年RI会長主催の日韓親善会議がソウルで、83年は神戸で、85年には再度ソウルで開催されこれに代り、自主的には87年に宮崎で開催、参加者524名であつた。日韓両国の関係は近くて遠い国とも言われ、歴史的には両国がしばしば不幸の関係にあつたことで、それは政治的な解決が基本であるが、ロータリーの国際親善の枠組みの中で出来るのは、お互いに言葉が通じる今をおいてしか無いとする委員達の熱意によるものであつた。

87年に89年ソウル国際大会支援の為にこの委員会の組織強化に当たり、私は菅野委員長の要請で委員の一員に加り、東京在住のことで連絡委員の職務を担当した。

このソウル大会には日本から16,000人の参加者があり、総参加者は38,878名となり78年東京大会(39,834名)に次ぐ参加者数第2位の大きな成果を上げて、韓国側から感謝された。

その後も89年ソウル 札幌航空便開通や、91年李方子様追悼会等の機会を捕らえ、両国の委員と少数の関係者のみでの小規模な会合が続けられた。

1992年仙台で第5回親善会議が「手と手 心と心を」をテーマとして開催され、800名に及ぶ参加者が予想されその為経費も嵩み、ガバナー会からの多額の支援を得て大きな成果を上げ、高く評価されたが、諸般の事情により経費援助を継続して受けることが困難となり、この会議は今回をもつて終了することが宣言された。





94 台北国際大会（RI 委員会顧問）

この委員会は3日間程の日程で台北の現地で3回行われた。主な任務は予算の確定と現地準備状況のチェックであり、予算の確定の主要なことは登録者数の予測が厳しい議題であつた。通常開催国の登録が一番主体になるが台湾の場合は会員数11,000名で少ないので日本と韓国からの登録数が主体になると予測されるので、この点で私の責任が大きくなつた。

過去の大会の状況、特に89年ソウル大会の数値（登録数38,800名、内日本より16,000名）があるが、これは景気絶好調の時であり、日韓親善委員会の協力、ソウルの地理的位置（北海道、東京、九州から等距離）等の特別な数値である。

しかし台湾との姉妹クラブ関係は302組もある有利さ等も考慮し台湾の場合は20%少ない12,000名と答申した。韓国分は同国からの情報を得て1,000名と予測された。途中経過は日本側旅行業者から逐次情報の報告を受けて概ね目標達成は実現の見込がついた。

実数は日本から12,909名、韓国から880名となり両者の合計は13,789名となり予測と極めて近い数値を得たことが高く評価された。

この委員会も大会当日は特別の用務もなく、ただ大会の進行を楽しく見守るだけであつた。

最終日次年度大会委員にバトンタッチを済ませ任務を終了することが出来た。

		総参加者	日本人
(1) 1978	東京大会	39,834	29,978
(2) 1989	ソウル大会	38,878	15,716
(3) 1994	台北大会	31,092	12,909





地区大会 RI 会長代理（88 年京都、94 年気仙沼）

地区大会の RI 会長代理と言う光栄の役を 2 回勤めさせていただいた。

1987 年 11 月 C.Keller RI 会長より自分に代わり 88 年 4 月京都での地区大会に参席せよとの親書を拝受した。この地区は京都、福井、滋賀、奈良の 1 府 3 県に跨がる日本最大規模の地区であり、R 財団、米山も寄付額は No.1 で些か身の引き締まる思いがした。

京都は戦前の大会にも参加、また自分自身が会員となった時の最初の地区大会が京都であつたこともあり、感銘を深くした。小谷 G.初めホストの伏見 RC 布施大会委員長の周到な計画と準備は見事に花を咲かせた。丁度桜の花も満開で京都ならではの最高のお持てなしをいただけた感激を Keller 会長にご報告することが出来た。

1994 年 1 月 R.Barth RI 会長より 4 月 23-24 日の気仙沼の地区大会に会長代理の役の招待を受けるよう指示された。会長とは台北大会準備会で度々同席の機会があり、また小松 G とは東京の地区大会でお会いし、気仙沼は風光明媚で人情味豊かな漁港です、気楽にお越し下さいと言われた。大会前夜は女優エリザベス・テラーが所持していたともいう豪華なメガ・ヨット「ディアナ号」での湾内クルーズの歓迎会は最高の贅沢な楽しみを堪能させていただいた。大会は臼井賢志実行委員長初めホストクラブ会員一同の綿密な計画と準備で簡素にして充実した成果をあげられた。記念講演は早川茂三氏の「政界裏話」があり、私は最後の大会所感でロータリーにも表と裏があるとの説をお話をして大会の締め括りをした。





京都地区大会（会長代理）ねぎらいの握手

1988年11月 ロータリーの友 半田 行（京都伏見）

全ての行事が滞りなく終了し、参加された会員の方々が帰途につかれるのを私達ホストクラブの会員が通路の両側に並んでお見送りをしていた。その日は八七 八八年度二六五地区年次大会最終日の四月一七日、小谷隆一ガバナーの閉会点鐘が打たれてからのことである。

帰路を急ぐ人が終に近くなつたころ、RI 会長代理の黒澤張三氏ご夫妻が見え、両側に並んでいる数十人の私達ホストクラブ会員とその夫人達一人一人の両手をとって握手をされ、感謝とねぎらいの言葉をかけられた。最後尾にいた私にも、同様に握手を求めてくださつた。

私はこの心の籠もつた握手に大変感激し真のロータリアンとは、この方のことだと即座に「友」3月号に掲載の「地区のたより」での「黒澤張三氏と本渡ロータリークラブ」の記事を思い起こした。黒澤氏の交換学生への思いやり観光旅行でのゴミ箱の整理、そして今回のホストクラブ会員に対する心の籠もつた握手は、氏にとっては何の気取りもない自然な行動なのであろう。また「大空の星を物干し竿で掻き回すようなことでなく、足もとの小石を拾おうとするものだ」という言葉が好きだと言われているのも頷ける。

気軽に握手された氏の手の温もりが忘れられない。大会の二日間、絶好の晴天に恵まれ、ホストとしての大役を無事終え、ほつと一息ついて会館の外に出ると、大会終了を待っていたかのように、爽やかな春雨が振りだした。





規程審議会（89年シンガポール、92年アナハイム）

1989年と1992年の2回、地区代表議員として参加した。この規程審議会は3年に1回開催されるロータリーの立法機関であるが、極めて民主的な手法で議論が尽くされてから採否が決められる。

審議会で決められても直ぐ有効にはならない。もう一度各クラブに賛否を問い直す丁寧さである。

89年は人頭分担金の増額、婦人会員の承認、2つの標語の内「超私の奉仕」を優先するのが特に注目された。

92年は一度廃絶された決議 23-34 が8年振り復帰した。更に新たな体験があった。2750地区の東京荏原 RC からの「2つの標語は同列とする」との提案が出された。当地区代表の私が提案者とならざるを得ぬ立場となつた。

このように前回の審議会で理事会提案で採択されたものを直ぐ次回で覆すのは極めて難事であると共に、審議会での発言は1人3分と厳しく限定されているので、この短い時間に難しいロータリーの哲学を全世界の代表議員に納得させるのは大変難しいことであつた。

日本人相手なら「車の両輪だ」と一口言えば済むことが世界相手ではそうはいかない事を体験した。

この様な提案はただ一クラブの思いつきで提案するのではなく、少なくとも先ず地区内各クラブの賛同を得、更に「ロータリーの友」なり、ガバナー会を通じ充分の根回しをし日本中の各クラブの賛同を得た上で提案すべきではないかと思う。それでも決議 23-34 の復帰には8年の歳月が掛かつていた。

これが私が二つの審議会に出て得た結論である。





青少年交換学生（パパ、ママ喜んで下さい）

1991年6月メキシコ シテイーに於ける国際大会参加の旅から帰ると留守中に溜まっていた沢山の手紙の中から一つの朗報があつた。元青少年交換学生チエリーさんからの手紙である。

「パパ、ママ喜んで下さい。私はシドニー・ロータリークラブの会員になりました。青少年奉仕を担当して昔の恩返しをしたいと心掛けています」とのことである。

シドニー・クラブはオーストラリア第一のロータリー・クラブ、会員数は 360 人でその内女性会員は 12 人であるとのこと。

喜びもさることながら、これは驚きだ。彼女が来日した 26 年前女性会員が誕生するとは想像もしなかつた。

1989 年シンガポールでの規程審議会に地区代表議員として参加し、女性会員の承認の審議裁決に際して「アイ」と大きな声で承認の 1 票を投じたのに今更驚く事も無いはずであるが、身近におきてみるとやはり驚きである。それは、ロータリー新会員にパパ、ママと呼ばれたことである。私が入会当時は二世会員だ、子供会だと自称していたのに、早や世代が変わり、我々は「親父会」になつてしまったからである。

それから 4 年ほどして、再び喜びの手紙が舞い込んだ。

「パパ、ママ喜んで下さい。私はシドニー・クラブでの女性第 1 号ポール・ハリス・フェローになりました」との通知である。

来日学生だけでは無い、日本からの派遣学生もロータリアンとして活動が始まっている。東京西 RC の吉田晋（旧姓北）さんだ。義父の故吉田盛次 PG の仕事（富士見丘学園）を立派に継がれている。





日本ロータリーの原風景を辿る（東京西 RC 刊行）

1993 年東京西 RC は「日本ロータリーの原風景を辿る」の一書を刊行された。1923 年関東大震火災に世界各国から寄せられた救援活動を報道する新聞記事の切り抜きとその解説で、当時創立間もない東京 RC は奉仕の実体を体験出来ずに過ごしていたが、この災害に対する真摯なる救援活動に目を覚まし、以後の日本のロータリーの奉仕活動の原点になったことが記載されている。

ロータリーの社会奉仕はかくあるべしと決められた決議 23-34 は、この 1923 年のセントルイスの大会で大論争の末に決められたものであるが、それから 3 ヶ月後に起きたこの大災害は世界の RC の奉仕に対する関心を一層に高めたものでもあつた。

この冊子の発刊の辞（要旨）－小林基茂（東京西 RC）昨年の秋の地区 IM の一分科会で黒澤 PG は議事の終了後下記のようなコメントを述べた。「今日の会合では規則や細則の運用にのみ論議が集中し、本来の RC の活動の根源である奉仕の理想の討議がされないのが残念です。この状態が続くとロータリーは益々形骸化して崩壊に向かうであろう、どうかロータリーの真髓を見直しして将来の発展に努力して欲しい」 ガーンとした、今日まで今一つ掴み切れなかつた私達に明確な方向を与えてくれた。感動するだけでなく次の世代に伝えてゆく具体的行動が必要と自覚した。そこで出会ったのが村上文蔵氏所蔵の震災当時の世界各国からの援助を報ずる新聞の切り抜きであつた。関東大震火災こそ日本のロータリーの原風景であり永遠に記録されて、この世界各国からの援助と友情を常に想起し奉仕の心のバックボーンであり続けるようにと念願し、この冊子を刊行することにした。





日本ロータリーの原風景を辿る（その反響）

富山惟太（2510PG）－1993年7月北海道南西沖地震による津波災害が発生したが、その2月前に刊行されたこの原風景を辿るの書が救援作業に大きく役立った。

伊藤恭一（PD85－87）－この震災時は対外通信は途絶の為諸外国のRCからの救済金は大阪RC気付で送られてきた。当時の大阪RCの会長星野行則氏は最も若い、最も身体の高い私の父忠兵衛に救済金を円貨に換えて速やかに東京RCに届けよとの指示をだされた。亡父忠兵衛は100キロを越す大男でしたが、窟強な2人の社員と共に札幌、米、缶詰等の詰まつたリュクサックを背に上京した。こうした古き良きロータリー活動を見直しして欲しい。

森三郎（2570PG）－これを見て思わずロータリーの青春を見たと感じた。今の老衰状況と比べて羨ましく思う。

黒澤一弘はこの災害の時は数寄屋橋の京稿区立泰明小学校の6年生であつた。夏休みを終え、二学期の始業式を済ませて家に帰ると突如ガーンと激震に襲われた。都心部は間もなく火の海に襲われ学校校舎は灰燼に帰した。復興は以外に早く、明け跡がかたずくと円錐形の米軍寄贈のテントの幾張りかが立ち授業が再開された。三月の卒業式までにはバラックの仮校舎も建てられていた。

この教室で使われた黒板は東京RCの寄贈のものと知つたのは10年余もしてからのことであつた。この黒板で学んだ学童の一人が七十年後のロータリーの会合での発言がこの書の発刊の動機になつたとのこと唯感慨無量の思いがする。東京西RCの皆様のお骨折りを感謝致します。





青少年交換学生（殿下からの年賀状）

2002年1月元青少年交換学生アンドルー・アークリー君から一冊の週刊誌が届いた。週刊新潮の1月24日号である。表紙を開けると、「殿下からの年賀状」とあった。殿下とは皇太子殿下である。宛名はアンドルー・アークリー様とご自筆で書かれ、徳仁とご署名されている。

宛先が無いが、これは葉書を封書に入れて送られるためである。アンドルー君は殿下のご学友。実際に殿下と机を並べたのは、彼がオーストラリアから学習院高等科に留学した1年間に過ぎないのだが、長く続く友情こそ、殿下のお人柄の賜物か。12,3年前に再び来日し、現在は日豪の橋渡し役の勤めをしている。殿下からの年賀状はこれまで版画を使われたようだが、今年からはパソコンを導入されたようだと説明がつけられている。

アンドルー君は74-75年度のオーストラリアからの交換学生である。私は当時地区青少年交換委員であつたので何かと世話をしていた故もあり、再来日の為の滞在ビザ取得の保証人を務めている。

65年にただ1人の学生が来日したことからはまったこの青少年交換活動も、現在当地区だけでも派遣受入合わせて年間30名、地区奉仕活動予算の内の最大額が与えられている。日本全部では派遣受入合わせて年間700名に及ぶ数に発展しているとも聞く。

その中でもこの28年に及ぶ殿下との交友の絆が今なお続けられてきていることは、この交換学生制度の最大の成果とも評価され、当地区の誇りでもある。

殿下からの年賀状はただアンドルー君ばかりでなくロータリー青少年交換活動に対する年賀状でもあろう。この50年誌の纏めの1つになればこれに過ぎる喜びはない。





Limelight

■ライムライト

殿下からの年賀状

賀正

本年も
よろしくお願
い
いたします。

メッセー
ジありが
とう

平成十四年元旦



オマーン園長陛下よりのアハジージュ号

郵便はがき

[] [] [] [] [] []

アンドルー・アークリー様

徳仁

A0058組

557194

もちろんお書き損じになられたものではない。宛先がないのは、年賀はがきを封書で送られるためなのだ。

アンドルーさんは皇太子殿下のご学友。実際に殿下と机を並べたのは、彼がオーストラリアから学習院高等科に留学した1年間に過ぎないのだが、長く続く友情こそ、殿下のお人柄の賜物か。

再び来日し、現在は日豪の橋渡し役を務めるアンドルーさん。殿下からの年賀状はこれまで版画が多かったというのだが、今年からはパソコンを導入されたようだ。気になる「メッセー」

とは、「雅子妃ご出産の祝電」という。





「おもて」と「うら」

何事によらず、物事には「おもて」と「うら」があるようです。「おもて」「うら」とは何か、辞書をひくと、「表」とは目に見える側で、「裏」はその反対側。「面」の反対は「心」とありました。

ロータリーにも「おもて」と「うら」があるようです。

日本の初代ガバナー米山梅吉さんは言われました。

ロータリーは見えぬところに仕事があり 目だたぬところに妙味がある。

最近のロータリーは見える仕事に夢中になり、目立つところに妙味があるようです。

二代目のガバナーの井坂孝さんは言われました。

ロータリーは着物の裏を整え着心地を良くするような仕事をしている。身体に密着するのは表でなく裏である。ロータリーも生活と密着して住みよい世の中を作ろうとしている。

最近のロータリーは表生地の良いだけを論じることが多いようですが、もつと裏生地の良い、仕立ての良さを評価されねばならぬと思います。表が良くとも裏の綻びが目立つ世の中です。

ロータリーは目に見えぬ裏が表であり、目に見える表が裏と言う不思議な世界です。

書家の相田みちおは書きました。

花を支える枝 枝を支える幹
幹を支える根 根は見えないのだ





「アマ」と「プロ」

ロータリアンは誰も、皆それぞれ自分の大切な本職を持つており、その余暇を奉仕活動に尽くされるのですから奉仕に就いては、言わばアマチュアです。アマチュアの仕事と穢すのでなく、アマチュアがしてこそ尊さがありそれをな成し終えた時、心に爽やかさが残るのです。奉仕は人に強制するものでもなければ、人から強制されるものでもありません、自ら進ん行なうことで尊さがあるのです。

しかし、ロータリーの金看板と言われる職業奉仕はアマチュアなどと言う生易しいものでなく、プロ中のプロとしての行動であり、些かの過ちも許されない真剣勝負であります。

ロータリアンとして選ばれたからには、その地域での、その職業での第一人者であるはずです。

例会はその人達の集まりであり、その雰囲気の中で過ごすことにより、何かを会得し、また何かを他に与えることが出来るはずです。

例会出席が奨励される所以であり、100 %出席と言う数字が大切なのでなく、その中身が大切なのです。

最近どうしたことか、アマチュアとしての奉仕であるべきところに、プロ紛いの活動が紛れ込んだり、逆に専門家としての腕の見せ所とも言うべき所に、素人にも及ばぬお粗末さが見られる事態は、憂慮すべきところだと思います。





職業奉仕 (小さな出来事、大きな喜び)

「門前の小僧」から書き初め、ここまできたが、肝心の金看板の職業奉仕のことが書き残せなかつた。ただ一つご報告できることがある。1976年11月のある日曜日銀座の店での日常当たりまえの小さな出来事が、ある英字新聞のコラムに名前もだされ、その仕事は perfect と評価されたことは私にとって大きな喜びであつた。

Christmas is coming...

CHRISTMAS IS COMING and signs are beginning to appear all over Tokyo... "the" day is just 25 days away; better get going. The other day I took my portable typewriter into Kurosawa on the Ginza to be cleaned. It was Sunday, and the store was jammed. A lovely gentleman approached me and introduced himself as the proprietor, Mr. Chozo Kurosawa. In four days my typewriter was perfectly repaired and cleaned, at the cost of ¥3,500. The maker of the machine has a plant in Meguro, Tokyo... when I took my typewriter to the factory, they said it would cost ¥35,000. No thanks.

BUT THE REASON for all this rambling is that Kurosawa on the Ginza (across from Matsuzakaya), is a charming place, even aside from the courtly Kurosawasan. I found all sorts of marvelous stationery items, and the loveliest array of Christmas cards. They have perfect little "stocking gifts" for the children in your life, and I bought a few great little lucite picture frames (almost) for a song.



WITH Jane Rees

HERE and THERE

told me about Maxim's holiday schedule. Christmas lunch will be served the 24th and 25th ¥10,000 per person (complete) and dinner (from 9 p.m. the same evenings) at ¥22,000, and also complete. And the New Years' eve gala prices in at ¥20,000... But, friends, reserve early. (Maxim's beautiful "Buche de Noel" Christmas cake may be ordered for ¥4,000.)

SPEAKING OF SONY, have you seen and have you read the enlightening history of Sony's success story, in Nick Lyon's new volume "The Sony Vision?" It's in the Press Club library.

BY THE WAY, it's the Riviera Coffee Shop above the Sunroser Foodshop in the same arcade which offers a whole baked chicken for lunch (with vegetables, etc.) for ¥1,100. And several times a week two foreign tycoons I know roll up in their Rolls Royces (one RR is red and the other RR white) and thoroughly enjoy this very good lunch. The manager might recognize you; he used to be at Maxim's.

IT'S FIESTA FILIPINA at the Keio Plaza Consort Club this evening. Ole... let's go. The Embassy of the Philippines will sponsor this evening's performance which fea-





あとがき

新世紀を迎えて世間は改革の激流への対応が急がれています。ロータリーにも改革の波が押し寄せてきました。世間の改革は激辛口ですが、ロータリーのそれは大甘口です。これぞロータリーとも言われる締め括りが大幅に緩められて、ロータリーは何処に行くのかと嘆く方が多く見かけるようになりました。

我がクラブの初代会長金森徳次郎氏はロータリーの友の創刊号に「私観ロータリー精神」を寄稿され、「私が最もロータリーを好きな点―他にどんな欠点があつても、ロータリーが好きな点―は奉仕の精神です。それは個が集まつて社会を作る力の中の最も大切なものです」と書かれています。

2002-03 年度の RI テーマはビチャイ・ラタクール会長により「慈愛の種を播きましょう」と定められました。この年度にこの書をお届けできますのを幸せに思います。

2003 年 3 月

黒 澤 張 三

[東京南 RC]

東京都世田谷区東玉川 1-33-12

TEL & FAX 03-3720-4047

e-mail kurosawa@tkh.att.ne.jp

